



第三百七十三回例会席上

若杉 要氏演述要旨

最近の日支關係に就いて

日本外交協會

0069

本邦の外交関係に
若杉要氏演述要旨
日本外交協會

3

1. 3. 3. 2. 1. 2. 1.

3



本篇は本年一月二十二日、管協會第百七十三回例会に於て、若杉前駐支大使館參事官の講演せられたる要旨なり。若杉氏の同意破断を経ざるものなるを以て、會員外の閱讀を差控えられたし。

昭和十二年二月

日本外交協會調査局

0070

目次

一	日支交渉の進む道	二
二	相手方を認識せよ	五
三	過去三十年間の變遷	七
四	蔣氏中心の統一運動	八
五	西安事件と南京政府	九
六	統一劇中の一幕	二
七	抗日運動と容共政策	四
八	社會運動としての抗日	一七
九	抗日よりも統一	一九
一〇	容共政策實現は疑問	二一
一一	西安事件の妥協條件	二四
一二	蔣氏は將來どう動く?	二六

目次終



最近の日支關係に就て

前駐支大使館参事官

若杉 要氏 述

私は最近、北平に一年半、續いて上海に一年、即ち滿二年半支那に居って數日前に歸つて來たが、其間、支那自体に於ても色々な出來事や相管頓挫に續出し、又日本の國內に於ても御存じの通りの色々な情勢を展開した。私自身としても、支那南北に居る間に大使が三人も更迭し、現に此の席に居られる有吉前大使の下で非常には有益な御指導を受けたこともあり、其後有田大使が来らざつと變らぬ、其間私は代理大使を二回勤めたが、また川越大使が来られると云ふやうに、日支外交機關の關係も相當變遷を経て來た。而して支那國內に於ては、蔣介石氏が數年間殆んど席を暖まらぬ位に常に飛行機で森んで歩いて國家統一運動に奔走して居ると云ふ情勢である。

0071

さう云ふ譯で日支關係に付て述べる種は澤山あるが、何分時間が少ないから、極く要點だけを概略申述べることにする。

一 日支交渉の進む道

先づ差管つて日支關係の喫緊の出來事は、現在南京で行はれて居る日支交渉であらう。その内情に就ても色々話し度いこともあるが私は現に其の責任者の一人であつた關係上、それを述べて宜いものかどうか、又現に交渉中であるので、省きたいと思ふ。大体の經過は既に外務省が發表して居るので茲には詳説しないが、この交渉に依つて現に成果を収めて居るのは成都事件と北海事件で、この解決は完全に出來上がった。猶ほ事件の解決で残つて居るのは上海事件と蕨口事件の二つであつて、之から交渉を續けることになつて居る。其他は日支交渉の非常に重要な部分であつて、まだ話の着かない點

が多い。有田外務大臣も言はれた通り、交渉は停頓中であるが、機會を得れば再開されるさうである。併しながら抑、此の交渉の原因は、最近支那内政の情勢及び之に伴ふ日本との關係に在る。私が支那に居る間でも相當に多くの事件が起つて居る。私が北平に居る時分に直面したのは、北支事件が二回、其他小さい事件は層山あつたが幸ひにして、前韓士垣内君が只今話を来たやうな事態で、此の二年有半で北支が曲りなりにも彼處まで行つたことは非常な成果であつて、曰支兩國の努力に依るところが多いと思ふ。日本の努力は無餘であるが、支那側の努力も相當に買つてやらなければならぬ。この北支事件以外に、成都、北海、上海、漢口、其他長沙等に於て、大使館の若としては殆んど奪命に殺れる位いろ／＼な事件に遭遇した。その結果、支那と日本の両政府の間には、現に我々が受取つて居る支那側から出た抗議も相當の數に上つて居り、我々の方から支那側に對して突き付けて居る抗議も相當の數に上つて居つて、抗議の出

0072

し競べである。斯う云ふ事が、交渉に依つて一掃されれば結構だと思ふ。従つて各事件の解決は、若干出来上がったものもあり、之の解決しなうと思つて居るものもあつて、事件そのものの解決は勿論遠からず目鼻が着くと思ふ。併し此等の事件を機會とする曰支交渉の大眼目たる兩國間の國交調整は中々容易ではない。無論國交調整の希望は、日本側にもあるし、又支那側にも之は殆ど熱心に希望して居るのであるが、數年來兩國間に出来た色々な複雑した關係が潛んで居る此際、たゞ一回や二回の交渉に依つて一舉に國交を調整することは、何人が其の局に當つても、容易に完成するものではないと思ふ。之は敢て故らに政府を辯護する譯ではないが、少し實際に携はれば誰にも感ぜられことである。平等互惠、民族解放を革命運動の大指導方針として居る支那と、不平等條約を固執し且つ國力其他ナショナル・アスピレイションの上に於て必ずしも相同じかゞざる日本との關係が、直ちに一回や二回の交渉で解決出来るとは

思へない。併しながら之をやらぬ譯には行かない。根氣よくやるほかない。之は支那の方でもさう言つて居る。とにかく之は相當氣長く忍耐に忍耐を重ねて西國内の情勢をも考慮しなればならぬから何年續いても根氣よく調整に努力するより仕方ないと思つて居る。永く複雑しを因縁の下に在り且つ政治經濟が非常にインターロックして居る二國間の如き關係を焦慮^{あせ}つてやるほど愚なことはい。焦慮^{あせ}つて解決しようとしを爲に色々な事を惹起した例は過去に於て屢々經驗したところである。従つて我々は、西方の立場を考へて根氣よく調整に努力を續けることが最も必要であると思ふ。

0073

二 相手方を認識せよ

そこで曰支關係調整の上にて於て我々が常に考へなければならぬことは、之は支那側から云つても同じであるが、要するに、己を知り

敵を知るは百戦百勝の基で、己を知ることは固より必要であるが、もう少し對手を正確に認識することが非常に重要なことであると思ふ。之は判り切つた原理であるけれども、この原理が、柱々にして若しくは常に、判らぬことが現はれるのを我々は如實に見て居る。之は外務省員としてのみならず日本國民として、もう少し支那の今日の實情をハッキリ認識しなればならぬのではなからうか。對手の實情に適しないことを鑑ら言つてみたところで通る譯もなし、又向ふを喜ばせようとして言つたことが却つて反感を買ふこともある。即ち相手方を如實に認識することが曰支關係の重大なるポイントであると思ふ。

昨年私がリースロス氏と上海で會見した時、彼は随分色々な議論をしだが、その中に「どうも日本人は頭が悪い。支那を一体どう見て居るか。殊に日本人の或一部の經濟の頭のプアなものには驚いた」と言つた。このリースロスの言は、やはり支那に對する日本の認識

が定らぬことを指摘したのだと私は考へた。

三、過去三十年の變遷

私は過去三十年間に四回支那を見た、即ち學生時代に上海に居たのが今から三十年前、即ち清末の支那。それから民國になつてもなく、民國初年の今から約二十年前の支那。其後蔣介石氏が廣東から北伐軍を提げて南京に國民政府を建てた頃、即ち今から十年ばかり前の支那。それから今度二年半居つて最近の支那。即ち四回程支那を見た。其間僅に三十年（無論支那は支那に相違ないことは日本が日本であると同じであるが）相當急激な變化をして居ることを私は痛感して居る。國より支那は支那に違ひない。封建時代の支那に違ひないが、日本も、政黨が非席に跋扈した頃は殆んど派手盛衰記その儘を我々は見た。此頃では藤原家の武門武家の時代に似て居る。

があるが、之も矢張り日本の一時代である。同様に支那は支那であるが、私が三十年間の體驗によれば最近では驚く程の變遷をして居る。

四、蔣氏中心の統一運動

この日支關係上、支那に對する認識を我々自から再檢討する上に於て特に注意しなればならぬことは、蔣介石氏及び其の一派を中心とする南京政府の統一運動、即ち前に述べた如き革命運動の指導精神の下にやつて居る統一運動、之を我々は餘りハツキリ見ないのではあるまいか、否却て之をくさす態度ではなかつたらうか。西安事變で蔣介石氏がまだ生きて居ると云ふ報道が傳つても、生きて居ると云ふことを誰も信用しない。生きて居ると云ふ報道が傳つても、それは偽物だらうと言ひ、本當に生きて居ると云ふことが判明すると、イヤ頭に傷を負つて最早蔣介石も駄目だなどと、何

とかして蒋介石氏を無きものにしよとす。新聞通信員の如きは、もてぞろ／＼殺しますから其のお預りなどと言ひ、現にアメリカのA.P. (アッソシエイション・プレス) などは真先に蒋介石氏の死を發表した。斯う云ふ譯で支那の統一運動に對しても相當僻んだ見方をして居る。勿論この統一運動は未だ極めて不完全であり未だ完成のものには相違ないけれども、既に半獨立の姿であつた西南を殆んど自分の勢力圏内に入れた。即ち苦手の胡漢民氏が死に、陳濟棠氏は逃げ出して、廣東は現在余漢謀氏が抑へて居り、廣西はまだ中々言ふことを聴かず相當反抗して居るけれども、蒋介石氏の最近數年間の飛行機旅行は統一事業を相當進捗して居る。西安事件も、見方に依ると、之は統一事業の一エピソードである。

0075

五 西安事件と南京政府

西安事件が始まつた時に上海で我々が中心となつて陸海軍の武官達とも殆んど毎日落ち合つて研究したが、支那側の多くの人の見方は、大体之は金を取る爲のパンピヤ才だらうと云ふことになつて居り、又之に政治的色彩を加へる人もあつた。蒋介石氏が生きて釋放された其の間に何だか政治的妥協條件があつたらうと云ふのは如何にも尤もらしい見方である。無論張學良側から要求條件の提出はあつたに違ひないが、南京政府要人は我々代表者に對して「南京政府は張學良と絶対に妥協した事はない。張學良の提出した妥協條件は宋子文一家の私的談合であつて、宋子文が蒋介石を救出に飛び込んで行つたのも政府が關係して居ることではない」と辯明して居る。蒋介石氏の運命が未だ決せざる時に、此事件に對して南京政府に於ては如何なる態度をとつたかと云へば、種々討論を重ねた末に、遂に張學良の官職を剥奪して討伐令を出した。この決定を爲したことに就て支那政府要人は、「此の政府の斷乎たる措置は或は蔣氏の生

命を危険に陥らすかも知れないと非常に心配して居るが、併し國民政府の威信を落さざらんが爲には、蔣介石の死生を犠牲にするも己むを得ないから、南京政府は既に張學良討伐の壯を決めて居るとまで既言して居る。之は世間で傳はつて居る張學良の答共抗日の主張に對して南京政府は妥協したのではないと云ふことを殊更に言ひたい爲に言つたことでもあらうが、併し南京政府が張學良の官職を剥奪し討伐令を出して、何應欽を討逆總司令として中央軍の北上を命じたところから觀ると、まんだら外交上の辭令でもなく、單なる芝居でもないやうである。その證據には、色々な事情から張學良がああ云ふ手段を採つて、あれに依つて、特に抗日運動を主張して居る西南の李宗仁・白崇禧、其他全國の抗日や反蔣將領が相當起つだらうと思つて蔣介石を監禁してみたが、之は學良の誤算であつて、結果は却つて愚評を蒙り、全國から逆賊扱ひにされ、寧ろ全國の同情は翕然として蔣介石氏に集まり中央擁護の通電が盛に發せ

0076

られた。この情勢に學良も驚いたとみえて態度を大分緩和したが、南京政府の態度は張學良討伐を決定する姿勢を執つて西安の東の涇南の爆撃を命じて居つた。そこで學良も慌てて、監禁して居つた蔣介石を釋放して、蔣介石の手書なるものを携行せしめて爆撃中止の懇願の爲に南京にやつて、十九日までに蔣介石自身で南京に歸る見込があるから爆撃はやめて呉れと云ふのであつた。世人は此手書は蔣介石が自分で書いたか誰か書いたか疑つて居るが、要するに學良が南京政府の強硬態度に面喰つて南京政府に爆撃中止の懇願せざるやうなことに押し詰められたのは事實である。さう云ふ譯で西安事件に對する南京政府の態度は相當断乎たるものがあつた。

六 統一劇中の一幕

西安事件は學良及び其の部下の蔣介石氏に對する不満から勃發し

た運動であるが政治的に之を觀れば此事件も蔣介石氏の支那統一運動の一エピソードに外ならぬのである。支那統一の爲に共産軍征伐を十年近くやって居る蔣介石氏に取っては、蔣氏の目の上のゴブである軍閥中の一實力者である張學良の勢力を殺ぐことも統一の一要素である。即ち東北から逐はれた張學良を北支に移し、更に北支事件の爲に河北省から河南方面に移駐せられた東北軍に對し給與も不渡勝ちで、更に之を殺々田舎に追ひ込んで、最近蔣鼎文が張學良の後を継いで西北剿匪前敵總司令に任命されると云ふやうに、張學良は蔣介石氏の統一事業の犠牲となつてどん／＼押し詰められて居た。その爲に張學良にも不平があつて自分の任務である共産軍の征伐を少しもやらなかつた。殊に張學良の部下の若い將校達が非常な不満で共産軍の前に陣を布きながら共産軍を撃たなかつた。之を蔣介石氏が非常に怒つて自ら二回も西安に飛んで共産軍に對する張學良の不仕舞を詰詰した。或時は部下將校の前で大いに面責したと云ふことさ

0077

へ聞いて居るが、之を張學良は相當憤慨して居たに違ひない。東北軍の主張は共産軍討伐のやうな同國人相討つよりも、失地恢復の旗幟の下に河北・東北に向つて共産軍を討つべきであると思ふのである。この点に於て西軍の抗日運動と相通するものがある。西軍では容共は主張しないけれども、盛んに抗日を標榜して、抗日救國軍を河北に進めることを南京政府に強要した。斯かる情勢から觀ても、西安事件は蔣介石氏の統一運動の一エピソードと見ることが出来ると思ふ。

七 抗日運動と容共政策

斯くの如く支那の統一事業に關聯して我々の見違すべからざる現象は抗日運動と容共運動であつて、この二つが日支關係を考慮する大眼目であらうと思ふ。

抗日運動に付ては、日本と國交を調整しようとする熱心に努めて居る今の外交部長其他は成るべく之を抑制せんとして居るが、支那政府の軍事當局殊に參謀本部及び若い士官等の間に抗日の空氣が瀰漫して居って、近年來所謂抗日戰備を整へて居る。この抗日戰備に付ては我々も現に見て居るが、殊に揚子江沿岸の要處々々に、ドイツ機をりから買つて來て新しい大砲を並べて居り、又方々に塹壕を構築したり、飛行機を買込んだり、軍隊の猛演習をやるのみならず、軍事訓練の指導班が到る處にあつて、商店の丁稚から中學大學の學生や百姓に至るまで所謂青年軍事訓練をやつて居る。先般私が滬甯に感じたのは、上海停戰協定區域を見に行つた際豫め支那側に通知をした爲に、附近の百姓を集めて軍事訓練をやつて居った。「何時かややつて居るのか」と百姓に聴くと、「今迄やらなかつたのだが貴は今日から始めたのだ」と答へた。之は一例であるが、昨年の夏、蘇州で見えたものは本氣でやつて居って、之は三月か、上海の中學

0078

生及び大學の下級生約三千人を集めて軍隊教育をやつて居つた。斯うした事は我々の方では差して問題にしては居ないのであるが、所謂抗日救國會が殆んど到る處に組織されて潜行的に抗日運動を行つて居る。私は代理大使として張群氏と會つた時「政府は排日を取締ると言ふのに、政府自身が對日戰備をやつたり軍事訓練を行つたりすれば抗日氣分を激成するは當然だがどうする積りか」と詰問した。張群氏は「軍事當局が軍備を進めて居ることはあなたの方は此の通りだ。併し必ずしも日本を敵とするのではない。現在いづれの國も軍備に熱中せざる國はない世界の現状だ。あなたの方の軍事豫算はどうですか。私の方の軍事教練は支那統一の爲め國民にライシプリンを與へる一つのムーヴメントだ。あなたを抗日と言はれるけれども、實は抗日よりも抗日と謂つた方が適當です」と答へた位である。

ハ 社会運動としての抗日

兎に角斯うした抗日気分が到る處に瀰漫して居る。殊に北平を中心とする學生間の抗日運動は熾烈である。(支那の學生運動や社会運動は大体に於て中心があるが、學生運動の中心は大体に於て北平である) 現
在北平には最も良い大學が揃って居るから、之が支那の學生運動の指導中心になつて居る。併し社会運動の中心は矢張り上海である。私は上海で何回も日本人の被害事件が起つて、市當局と屢々折衝して内情を知つたのであるが、相當複雑した抗日運動の組織がある。併しながら抗日は支那一般の空氣であつて、抗日を言はないと自分の立場がないやうな状態である。先般上海や青島で紡績のストライキがあつて非常に苦心したが、之を校々調べてみると、單なる労資問題ではなくて、一種の抗日運動である。大して根強い運動ではなかつたが、上海の抗日救國會の指導に基く社会運動としての抗日運動で

0079

あつて、之に學生や共產黨員が参加し、もつと背後には保安隊の不
平分子が居つて之を指揮して居るのを現に見る者がある。「給料を
五十仙上げて呉れ」と要求するから、「それでは五十仙上げてやら
う」と聲明しても、また他の事を言ひ出してストライキを止めない。
それは抗日運動の手先が日本の支那進出の最大企業たる紡績に打撃
を加へるのが一つの目的であつて巧みに機械を壊しに掛かる、労働
條件の交渉などには重きを置いておかない。之も一つの社会運動とし
ての抗日の現はれである。幾ら市當局に談判して其取締を勵行させて
も治まらないので、上海で社会的勢力の元締である杜月笙と云ふ青
帮の親方、彼は此頃では上海のチャキ／＼の實業家であつて、青帮
には多くは資本家や金持の徒弟が加盟して居るか其の首領である杜
月笙に、市長からも頼み、我々の方からも頼んで、彼の斡旋で見事
にストライキを解決してしまつた。青島ではさうした社会的リーダ
ーがない爲に非常な紛糾を來すに至つたが、兎に角さう云ふ風に社



會的な抗日運動は次第り上海が根據地になつて居る。

九 抗日よりも統一

其他新聞雜誌等を見ても抗日氣分が瀰漫して居るが、然らば日支關係の上に抗日的氣分や行動が現實に如何なる程度まで現はれるか之は餘程考へ物であると思ふ。西安から釋放された蔣介石氏が今後どう云ふ行せ方をするか。大に注目を要する所である。蔣介石氏が今迄ずっとやって居つたのを見ると統一第一主義を堅持して、先づ西南の抗日運動を抑へて廣東廣西を統一し、西安の張學良の抗日の要求にも同意を與へてゐるかどうかが疑問である。と云ふのは、日本に正面から大衝突をすれば、其結果は蔣介石氏自身が失脚するの羽目に陥る位の事は判つて居るから抗日はしない。けれども支那の統一が完成すれば彼は或は正面から日本に抵抗して来るかも知れぬ。

一九

然らば支那が何時さう云ふ國力になるか、何時蔣介石氏が日本に堂々と抗日を挑んで来るか否かは中々むづかしい問題である。とにかく蔣介石の今迄の行き方は統一第一主義であつた。之は現に西安事件の近因とも謂ふべき事件、即ち一昨年の九月、彼處に學生の猛烈な抗日運動があつたが當時之を地方官が抑へたのであるが、更に昨年西安事件の直前、即ち十二月九日、江の學生運動の記念日のデモストレイションに對して、蔣介石氏は之を壓迫せしめたので、遂に彼處の二三名の學生が傷付いた。この壓迫に對する憤慨と學長の部下の不平が導火線となつて、西安事件が勃發した。之等の等から觀ても、抗日をやってはいけなさと云ふことは蔣介石氏としては相當決心して居る様であり、先づ統一を完成することが彼の第一主義ではないかと思ふ。蔣氏が今回學良が提出した條件に同意したとかしないとか云ふことが傳はつて居るが、その條件の一つたる容共と云ふことは、支那の國內政治に取つても亦日支關係の關係上にも最も

0080

重大な問題であるが、併しそれが抗日に付て蔣介石が果してどう云ふ態度を執るか、この点に付て支那の要人と随分話してみれば、西安事件後に於ける蔣介石の考、及び西安事件に依つて影響を受けた南京政府内部の複雑した関係、例へば馮玉祥や于右任のやうな聯蘇傾向を有する首領の連中が、今迄の如く蔣介石の統一第一^{第一主義}の抗日^{抗日}第二の方針に服するや否や、或は蔣介石自身が現在國內に瀰漫して居る抗日暴分に強いられて、其の統一第一主義を棄てて抗日第一主義に変わるかどうか、即ち兩南の李宗仁・白崇禧等の主張のやうに、先づ抗日をすれば支那は統一するのだと云ふ立場を執つて正面からどんく日本にぶつ衝かつて来る政策を執るかどうか、之は大きな問題であらうと思ふ。

一〇、 容共政策實現は疑問

日支關係に於て注目すべきもう一つの重要問題は容共である。即ち共產黨乃至共產軍と妥協し延いては蘇聯軍と提携するや否やの問題である。之に付ては、蔣介石が北伐により國民政府を確立する爲めボロディンやガレン等のソヴェエト一派を驅逐した頃の苦い經驗と、蔣介石一派の現在の國民政府の根底をなして居る所謂浙江財閥……この浙江財閥は實は不正權な言ひ方であつて、浙江人ばかりでなく、江蘇人も大分入つて居る。要するに上海及び寧波方面を根據とする資本家の集まりである。この所謂浙江財閥、殊に朱子文、孔祥熙等が天下の財權を握つて居るが、之を基礎とする蔣介石並びに其の権力下に在る南京政府が、ソヴェエトの勢力を侵入せしめて、此の支那の資本主義を壊すやうな容共方針を採り得るや否やは大きな疑問であらうと思ふが、日支關係及び日本以外の國と支那との關係如何に依つては、已むを得ず馮玉祥・于右任一派の容共聯蘇政策に引張られないとも限らない。之は餘程研究を要する点であ

らうと思ふ。現に中共の一勢力なる杜月笙の如きは、一名「共産黨
 削減會總裁」とか云ふ別名をへ持つて居るさうであるが、本人自身
 が資本家として勢力を拡張せんとして努力しつつあるのに、斯うし
 た指導者が果して共産黨や共産軍と合作行動に出るや否や頗る疑問
 である。少なくとも上海方面を根拠とする資本家を基礎として居る
 蔣介石一派の政權が容共政策を採ることは、そこに他からの大き
 な原因が加はらざる限り、到底あり得ないことではなからうか。こ
 の私の観測は或は誤つて居るかも知れないが、蔣介石氏と雖も此の
 点に付ては非常に考へて居るだらうと思ふ。

要するに、支那の統一事業に關聯して抗日及び容共がどう云ふ方
 向に傾くか、南京政府の實際權力を握る人々が此の問題をどう取扱
 ふかと云ふことが、日支關係の將來を決定する大きなファクターで
 はないかと思ふ。之は判り切つたことであるかも知れないが、現場
 に居つて痛切に感ずる事柄であるので、御参考までに述べた次第で
 あります。

二、西安事件の妥協條件

西安事件に依つて蔣介石氏が、墮いたと観る人と、聲望を高め
 と云ふのと、二つの見方があるが、前にも述べた如く、寄つて集つ
 て成るべく蔣介石氏を葬らうとしても、現に生きて還り、イヤ彼は
 逃げる時に頭をやられ結局廢物になるだらうなどと難癖を付りんと
 されたこともあるが、幸か不幸か頭にも傷を付けてゐないやうであ
 る。クーデターのあつた十二月十二日、上海でも真相が判らな、南
 京では殊に判らない。宋子文一家が氣狂ひのやうになつて、蔣氏の
 生否確め方をドナルドに頼み込んだ。ドナルドは先に張學良の顧問
 であつた關係もあり、現に蔣介石氏の顧問でもあり、斡旋するには
 好都合な立場に在るので、彼が飛んで行つて蔣介石氏に會つて、



「蔣介石は生きて居る。若干の會話を交した」と云ふことを南京政府に報告したのが十四日、洛陽に出て來たのが十五日、さうして洛陽から長距離電話を宋子文・宋美齡等に掛けを英米の總領事館では情報を得て居った。私は丁度十五日の晩にイギリス・總領事ブレナン氏の處に晚餐に行つて、ドイツ・フランス等の總領事も來て居つたが、ブレナン氏が喜んで「蔣介石は生きて居る」と言つたがドイツの總領事の如きはどうかしても信用しないので、「ドナルドが蔣氏と會つたと言ふが誰が其の會つたのを見たのか」と反問する位であつた。

西安事件の真相が單なる金取りであつたかどうか又は其の政治的妥協條件がどうであつたかと云ふことは誰も明確には判らない。唯西安で東北軍の機關銃と謂はれる西安日報に、妥協條件として六箇條出て居るのを見れば、政府の改組とか、國人同志の内戦をやめて敵對行動を断行せよと云ふやうな條件があるが、抗日と云ふ文句は

ない。敵對と云ふのが日本を指して居るのだらうと思ふ。それから千萬元を東北軍及び揚虎城に渡せと云ふこと。それから抗日運動の指導者である、上海の辯護士協會長の沈鈞儒、前浙江實業銀行の副頭取をして居つた章乃器、等の有力な連中が、上海の日本人殺害事件や紡績のストライキ事件等の背後に控へて居るので、南京政府でも断乎たる決定を以て之等抗日運動指揮者の大物を捕へたが、彼等を釋放せよと云ふやうなことも條件にして居る。

一三、蔣氏は將來どう動く？

西安事件に於て、日本人の考から云へば、蔣介石氏が敵の軍中に俘虜になることは大將として惨めなもので、之で蔣介石も名譽を失墜したらうと云ふ見方をして居つた者も少くないのであるが、支那人の考から云へば、やはり現今では第一の眼目は支那の統一であつ

0083

く、この統一に蔣介石以上の事績を挙げた者がない以上は、好むと好まざるとに拘らず此の人を失ふことは統一運動の大打撃であるから、何とかして此の人を守り立てなければならぬと云ふことに一致して居る。之が學良の違算を来し、また蔣介石が選うた時の南京の歡迎振りは盛人なもので、上海に於ては、蔣介石が西安を出た日はクリスマスの時であつたが、上海中の爆竹が賣れ切つて何處にもないと云ふ歡迎振りを示した所以である。殊に南京政府の要人達の歡迎會の席上に於ける座長の歡迎演説の中にも、監禁された間に於ける蔣介石の言動に滿腔の敬意を拂つて居る。この言動は、實は誰も聴いた人はないが、多分宣傳だらうと思はれるが、併しながう渭南爆撃を中止して呉れと云ふ蔣介石の手紙を持つて釋放された蔣鼎文が、十八日南京で、學良に對する蔣介石の態度に關する談話をして居るやうであるが、それに依れば、蔣介石の言動は實に見事である。先づ學良が蔣介石に對して色々注文したのを断然拒

0084

絶して、學良に對して「お前は自分の部下である。部下が叛逆したのであるから、俺を洛陽まで還すか、然らざれば俺を殺せ」と言つて要求を毅然として拒絶したと報せられて居る。それから愈々取引が濟んで蔣介石が西安を立つ時、張學良其他の部下に對し非常に長い訓示をした様に報せられて居る。之も真偽は判らないが、南京政府は之を宣傳用に配つて其の全文を支那新聞に掲載して居る。實に懇切を極めた訓示であつて、蔣介石が革命運動を起して現在に至る迄の國內統一の苦心を細かに述べて、統一完成の必要を説き、「お前達の誤つた事を今改めるのは結構だ、よく一致協力して孫文の教の通りに進め」と云ふことを懇々と言つて居る。蔣氏生還の祝賀會主宰者がこの二つの事柄を歡迎辭中に述べて、「我々の指導者として蔣介石氏は實に申分のない人であるから、今後も載いて益々進歩しよう」と云ふことを言つて居るから、蔣介石氏の勢威が落ちると云ふよりも、寧ろ蔣介石氏が支那に取つて必要人物であることが

一般に確認された次第で同氏のインポートを増したと言つて宜い。即ち西安事件の一番儲け者は蔣介石氏であらうと思ふ。
故に蔣介石氏が再び政権の地位に就けば其の勢力は益々鞏固になるであらうが、南京政府部内の長老の意見と、蔣介石氏が今まで執つた方針とが異して何處まで齟齬されて行くか、今後の統一運動に關聯して、抗日及び容共の二問題は我々の最も關心を有する處であるが、この點に付ての断定は私は差控へて諸君の御研究を仰ぎたい。

(了)

0085